ドイツ通信

大阪大学経済学部　宮本匡章

☆心境の変化☆

去る8月30日の早朝6時，デンマークのコペンハーゲン空港に着いたとき，本当に外国に来たのだという実感が初めてわいてきた．そして見るもの，聞くもの，食べるもの，すべてが珍らしく運河と古い家並の市内や余りにも有名な人魚の像を見物しながら，何回となく感激したものであった．このような心理状態は，翌日のフランクフルトでも，更に二ケ月をすごしたアロルゼン(Arolsen)という田舎町（人口約六千人）に着いてから一週間ほども続いたように思われる．しかし，時間がすぎ，ドイツの生活になれ，極めて狭い範囲ではあるがドイツ国内を旅行していると，はっきりわかるほど自分の心に変化が現われてきた．最初，これこそがドイツの風景だと心をおどらせた同じ風景が，もはやありふれた平凡なものとしか見えず，本当に特色をもつもののみが何かを訴えてくるようになっていた．しかし，このような変化は更に時間が経過しヨーロッパやその他の国々を見聞したときに，再び起るものと考えられる．

従って，これから書く印象記もあくまでも私個人がその時々に体験したものにすぎず，決して一般的なものでないことを最初におことわりしておきたい．

☆ドイツ人気質の1面☆

工業都市カッセルと古城と大学の街であるマールブルクの中間にあるアロルゼンでは，ゲーテ協会のドイツ語コースに参加し，指定された民家の三階の一室に落着いた．その下宿から教室までは，巾70米はあろうと思われる立派な並木道を歩いて十五分ほどの距離である．

下宿では家の入口と三階の廊下の共通のカギを渡されていた．10日ほど経ったある日，入口の戸を開け三階まであがったが廊下の戸がどうしても開かない．止むをえず奥さんにその旨を伝え，錠前がこわれているのではないかと不自由なドイツ語で言うと，「あの錠前はドイツ製の完全なもので，この10余年間一度としてこわれたことがない．貴方がどうかしたのだろう」という返事．二人で何とか開こうとするが，一向に開く様子がない．終に「ドライバーが使えるか」と尋ねるので私がそれを使って分解すると，スペヤーのカギが内部からさしこまれていることがわかり無事解決した．下宿の息子と2人で3階を使用していたのであるが，彼がうっかりしていたことになり，奥さんはしきりにあやまっていたが，私には疑われたことよりもドイツ人の自国の製品に対する絶対の信頼感が実にうらやましいものに思われた．われわれであれば，恐らくまず第一に錠前の方を疑ったにちがいないからである．

アロルゼンもあと十日ばかりになったある日，撮り終ったフイルム2本を小包で日本に送ろうとした．（最近になって，日本のフイルムは別の発送方法のあることを知った．）小さな箱に入れ郵便局に持っていくと，もっと安く送る方法がある．封筒に入れて出すべきだ，といって受取ってくれない．仕方なく封筒に入れて再び持って行くと，またもや頭をふりふり「そうではない」という，少し考えた末奥に入り現物をもってきた．良く聞きとれなかったのだが，示されたものを見て「開封にしろ」ということであったことを知った．日本であれば次からはこうした方がよいとは言ってくれても，出そうとするものを，しかもさほど料金に差のないものを受取らないところはあるまいと考えると，ドイツ人の合理主義に脱帽せざるをえない．

他の表現をすれば，ケチの精神が徹底していると言えるかも知れない．ボンに来てから教授の自宅に招待された．夜の8時に来てほしいと言われたのだが，夕食かアルコールのみかがはっきりしないので（子供をねかせてからの夕食であった），宿舎の管理人（50才位の婦人）に質問した時，決して11時半すぎまで飲んではならないという．とても，私のドイツ語でその時間まではもたないと思ったが，ドイツの習慣かと尋ねると，最終のバスが12時だからそれよりも遅くなると，タクシーが必要で，5～6マルクとられるからだと返事をされアッーと言ってしまった．実際には，11時すぎ教授に宿舎まで自動車で送ってもらった．

☆ドイツ語コース☆

ゲーテ協会のドイツ語コースは，外国にも各所に設け

られているがドイツ国内には21ケ所にある．アロルゼンには，そして私の参加した9・10月のコースには，約80人の受講生が集まってきた．その半数はアフリカの黒人であり，残りの約半分がフランス人であった．能力に応じてクラスわけされ，週30時間の授業が始まったのであるが，ヨーロッパとアラブ系の学生の上達はめざましいものがあった．彼等は，文法のことを余り考えず，従って間違ったドイツ語ではあるが，自分の主張をドイツ語で表現できるようになっていた．それに対し，東洋人特に日本人は，試験こそ良い点数をとるものの，話す方はほとんどみるべき上達がなかったと言ってよい．受講生の平均年令が20才前後というから，4人いた日本人（そのうち3人が私と同様に，フンボルト財団の奨学生であった）は，10年以上も年をくっていることになる．しかし，年令のせいばかりでないことは，私と親友になったレバノンの30才になる銀行員をみているとよくわかる．日本語の構造そのものが，ドイツ語なり英語なりと根本的に異なる上に，名詞の性別があるのであるから，よほど慣れた事柄でないかぎり，正確に表現しようとするとスムースには出てこない．加えて，アクセントが大きな役割をはたすので，これまた苦労の種という次第．

ゲーテの授業も残り少なくなったある夜，下宿の主人（63才）と遅くまでワインをのんだ．細かい微妙なところにくるとお互に理解しえない．そのもどかしさと，アルコールのせいか，同時に「何故この狭い世界に多くの異なった言葉があるのだろうか．同じ言葉があればなあー，」と言い合ったものであった．

私には良くわからないが，教え方にも問題があったようである．イスラエルに二年いたアメリカ人が，コース終了前に目立っていらだってきた．彼は初心者だったがドイツ語の文法を一応教えてもらっただけで，とてもドイツ人と話をすることができないことを悟った．イスラエルでは，一ケ月もあれば話をできるようになった経験から，「俺は何のためにこのドイツに来たのか！」と，テーブルをたたいて怒っていた姿が今なお眼底に焼きついている．

私も成果の少ない方であったが，聞くことはかなり楽になった．通常のスピードでやられると，今なお自分の専功の講義以外では，わからないことが多いのだが，ドイツに到着した当時のことを考えると，ドイツ語コースの効果はあったように思われる．それにも増して各国の若い男女と，授業のみでなく食事の時までも一緒に2ケ月をすごしたことは，楽しい想い出となっている．最後の日には，それぞれしっかり握手をして別れてきたのであるが，フランスのかわいい女の子がパリに来たら案内するといって自分の住所を書いてくれたり，いつも両隣りに席をとり，お互に助け合ったパキスタンの銀行員やアメリカの歴史学者と，それぞれ住所を交換して再会を約したといったことは2ケ月間同級生であった副産物であろう．

☆ドイツの商店☆

商店の形式とか品物など特にドイツらしいと感じたことはなく，スーパー・マーケットもあって，多くの人々を集めている．普通の商店ではぶらりと内部を見物することがむつかしい．百貨店なども店員が「何をお求めですか」と尋ねにくる場合が多い．その点，スーパーでは日本のように気楽に買物ができるし，殆ど言葉を必要としないので，日本人の人気を集めている．

ドイツに来て，最も神経を使うのが買物である．月曜から金曜日までは，朝9時から12時半までと，午後2時半から6時半までが営業時間．土曜日は2時まで．（ただし，場所によっては第1土曜日のみ5時か6時まで開いている．）従って，夜散歩しながら買物をするとか，土曜の午後や日曜日に家族ぐるみで買物をするといを楽しみがない．もっとも，ショーウインドーには電気がついているので，財布を気にせず，眼だけの買物はできるのだが，日本での感覚からすると不便で仕方がない．まだアロルゼンにいたある日曜日，日本人ばかりでカッセルに出掛けた．運悪く途中から雨が降り出し，同行の女性の靴に水が入りだした．何とか靴を購入したいのだがすべて店が閉っている．ある街角にきたとき，一軒の靴屋に相当の人がおり，何やら会議をしている様子，日本人的な感覚と女性に親切である国柄を考え，彼女を先頭に店に入ったまではよかったのだが，店の主人らしい男が現われ，丁重に日曜日は営業しておりませんという．事情を話しても，はっきり「例外はないのです」と言い切られてしまった．連日例外だらけの文法でいじめられていた時だけに，この「例外のない原則」には大いに腹をたてたものであった．